

人間科学の臨床的適用の原則

石川 憲彦 (東京大学小児科)

目 的

人間に関する科学は、本来方法論的には、自然科学も社会科学も同一である。しかし、生物学的事実が、必ずしも臨床医学にそのまま用いられないように、研究成果と臨床応用の間には、様々な論理的・倫理的・実践的な壁が存在している。

母子相互作用は、主として「関係」における科学であるが、関係には、関係を形成する主体と客体、及びそれを観察するものといった内的構造の複雑さと共に、その関係を規定している環境などの全体構造も複雑である。従って、一つの研究事実をどう臨床応用するのかは、幾多の関門を経て検証され吟味されなければならない。

この吟味・検証に関しては、これ迄方法論的な検討が行われてきた形跡がない。研究に関する批判は、同じ視点の研究者内での、方法論批判や、全く立場を異にする研究者からの、立場性への批判としてのみ登場してきたと思われる。

今回、研究を応用するにあたって、どのように論理的・倫理的・実践的にその応用を評価できるのかを、検討してゆける方法論を研究してみたいと考える。

方 法

様々な母子相互作用に関する既成の研究及び今回の本研究班において発表される研究について、現実に引きおこされた諸問題、及び理論的に引き起こされ得るであろう諸問題を、立場の如何、評価の如何を問わず、まず問題点として取り上げる。

次に、とり上げた問題を、研究自体の問題であるのか、研究の応用に関する問題であるのかに分類する。研究自体の問題は、これ迄に様々な確立された視点があるので、今回の対象から除外する。

ただし、研究自体に関する問題であっても、応用上の問題とも関係すると考えられるテーマについては、別途の考察を加える。

応用に関する問題については、その問題を分析する視点を固定化せず、視点が位置する座標を明確にしてゆく作業を行う。

この座標の設定から、臨床応用を行ってゆくための、現時点での守られるべき要綱を整理し呈示する。

結 果

従来の報告の臨床応用に対する問題点を整理してゆく為の、仮説的尺度としては、今の所次のような、多層的ベクトルが考えられている。

- A. 学際的ベクトル
 - I. 生物学的研究方法論
 - II. 医学的研究方法論
 - III. 心理・教育学的研究方法論
 - IV. 社会学的研究方法論
- B. 価値主導型ベクトル
 - I. 効率論
 - II. 社会価値論
 - III. 個人価値論
 - IV. 関係価値論
 - V. 思想論・文化論的価値
- C. 倫理的ベクトル
- D. 論理的ベクトル
- E. 主体の問題としてのベクトル
- F. 研究者の関係性におけるベクトル
- G. 時間的ベクトル
- H. エコロジー的ベクトル

A~Hは、更に細目を備えていると共に、共通点も多いので、今後、座標軸の設定のために、整理されてゆく必要がある。